

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：25407

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12427

研究課題名(和文)「よそ者」と「はれ者」による内発的復興のアクションリサーチ

研究課題名(英文) Action research on endogenous reconstruction by "strangers" and "outcasts"

研究代表者

宮前 良平 (Miyamae, Ryohei)

福山市立大学・都市経営学部・講師

研究者番号：20849830

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、愛媛県西予市野村町の復興を実践的に研究することを目的とする。具体的には、酒文化調査、乙亥大相撲調査、復興曲線インタビュー、NEOのむらによるアクションリサーチの4つを実施した。酒文化調査では、野村町の独特な酒文化とその変容を明らかにし、復興の原動力としての酒の役割を探った。乙亥大相撲調査では、地域の伝統行事である乙亥大相撲の歴史と文化的意義を再確認した。復興曲線インタビューでは、被災住民の復興過程における経験を質的に明らかにし、課題と成功事例を整理した。NEOのむらによるアクションリサーチでは、地域の「よそ者」として地元の人々と協力し、様々な活動を通じて地域復興に寄与した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、地域文化と復興の関係を具体的に解明した点にある。特に、酒文化と伝統行事が復興の原動力として機能することを示し、復興過程における住民の経験を質的に分析した。また、「よそ者」と地元住民の協働が地域復興に与える影響を明らかにした点も重要である。

社会的意義としては、地域文化の再評価と継承を通じて、被災地の持続可能な復興モデルを提示したことが挙げられる。さらに、関係人口の増加と地域内外の交流を促進することで、過疎化対策や地域活性化に貢献する可能性が示された。

研究成果の概要(英文)：This research aims to study the reconstruction of Nomura Town in Seiyō City, Ehime Prefecture, affected by the Western Japan Heavy Rain Disaster, focusing on the "related population." It includes four parts: a study of local sake culture, a survey of Otoi Sumo, recovery curve interviews, and action research by NEO Nomura. The sake culture study revealed the unique sake culture of Nomura Town and its changes, exploring sake's role as a driving force for recovery. The Otoi Sumo survey reconfirmed the history and cultural significance of the traditional event. The recovery curve interviews qualitatively clarified the experiences of affected residents during the recovery process, organizing challenges and successes. The action research by NEO Nomura involved collaborating with local people as "outsiders," contributing to regional reconstruction through various activities.

研究分野：社会心理学

キーワード：関係人口 災害復興 日本酒 過疎

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、西日本豪雨水害の被災地である愛媛県西予市野村町を舞台とし、関係人口をキーワードとしながら過疎地域の復興について実践的に研究を行うことを目的とする。

本研究の対象地となる愛媛県西予市野村町は、少子高齢化が喫緊の課題となっており、令和2年の高齢化率が西予市野村地域で45.8%と人口の半数に迫る勢いである(西予市ホームページより。なお、全国平均は27.7%)。また、2018年7月の「西日本豪雨」では、ダム放流により死者5名、全壊305件を含む被災件数1,388件と壊滅的な被害を受けた。その後の復興過程において、「よそ者」(ボランティアや移住者など外部から野村町に関わりをもつようになった人びと)、「ばか者」(地域の中であって既存の枠組みにとらわれない自由な発想を持つ人びと)、「若者」(高校生や大学生などあらたな世代)の重要性が分かってきた。それに加え、「はれ者」(地域であってこれまで活用されてこなかった資源やなかなか脚光を浴びることの少なかった人びと)の存在も重要であることが示唆された。本研究では、上記の「よそ者」「ばか者」「若者」「はれ者」の4者をつなぎつつ、新たな復興像を提示することに取り組んできた。具体的には、以下の研究を実施した。現地の酒文化調査 乙亥大相撲調査 復興曲線インタビュー NEOのむらによるアクションリサーチの4点である。 については、復興過程の基盤となるべき現地野村町の文化を明らかにすることを目的とし、 については町民が経験した復興過程を質的に明らかにすることを目的とした。それらを踏まえて、研究者として、また野村町に関わる者として復興に寄与する実践を行ったのが である。以下にそれらの実践研究を詳しく説明する。

### 2. 研究の目的

#### (1) 酒文化調査

野村の復興に関して、地元住民と接して驚かされたのは、被災から1年も満たない2019年5月の宴席において、皆が快活に酒席を楽しんでいる事実であった。しかも、「サシアイ」という独特の返杯儀礼を繰り返し、親睦を深めているのである。その後も野村地域住民全員で構成する野村地域自治振興協議会は復興を目指した数々のイベントを企画・実行し、そのたびごとに飲み会を開催してきた。ここから、野村の復興の原動力に酒が関係している可能性があるとの仮説が生まれた。

まずは野村の酒文化の実態と変容について把握する。コロナ禍にあつて、酒器を強要する「サシアイ」が出来なくなり、with コロナ・after コロナ下では酒宴の有り様に変化をもたらす可能性が想定される。そのため野村の酒文化の過去・現在を調査・記録しておく必要がある。

次に野村の酒文化の特質と社会的意義を究明する。復興の原動力として酒が関与しているとする仮説が正しければ、日常的にも何らかの意義を有するはずである。災害復興期、コロナ禍という非日常と、日常において、酒は野村の人々や地域にとってどのような存在であるかを追究する。

#### (2) 乙亥大相撲調査

本研究の対象地である愛媛県西予市野村町では、地域を代表とする祭礼行事として奉納相撲を中心とする乙亥大相撲(乙亥祭り)が開催されている。本行事の由来は、嘉永5年6月に発生した野村大火の火鎮祈願の奉納相撲である三十三結びにあり、西日本豪雨やコロナ禍においても規模を縮小しながら継続され、2021年度に170回を数えている。また、本行事を中心として、本町では相撲にまつわる各種の文化や経験が連綿と伝承されており、乙亥大相撲とこれをめぐるローカルな相撲文化は本町のシンボルの一つとなっている。

現在の乙亥大相撲は往時と大きく変化しており、本行事の由緒である三十三結びが行われていないように奉納相撲としての色彩は薄れ、プロアマ対抗戦を中心とする興行または競技の色彩が強まっている。本行事の旧来の勤進元は緒方家であったものの、近代に入ってから勤進元は組長会に担われるようになり、現代では観光協会を中心に商工会、旧野村町、教育委員会等が連名する実行委員会形式で担われている。いわば、旧来の勤進元である緒方家によって現れた「相撲に熱をあげた地域の『ばか者』たち」の伝統にとらわれない創意工夫により、乙亥大相撲は単なる奉納相撲の域を脱し、地域を彩る重要なイベントとして現在まで継続されてきたといえよう。

一方、乙亥大相撲は200年に届こうとする長大な歴史を持っている行事でありながら、その歴史やこれにまつわる各種習俗についてはほとんど記録が残っていない。また、プロアマ対抗戦とは別に町内住民による取組が行われているものの、本町の人口減少に伴う参加者の減少及び観覧者の減少が課題となっており、地域住民に連綿と受け継がれてきた様々な相撲文化もその伝承に不安が指摘されている。乙亥大相撲は西日本豪雨の復興過程において復興のシンボルの一つとして位置付けられてきたにもかかわらず、その来歴と将来に総じて不透明な部分が多い。今一度、現在の乙亥大相撲をかたちづけてきた「ばか者」たちとともに、近現代の乙亥大相撲の中で不可視化されてきた乙亥大相撲の来歴や各種伝統を再確認し、将来の乙亥大相撲への基盤作りが必要となろう。

本研究では上記した乙亥大相撲をめぐる課題に着目し、研究チームである「よそ者」と乙亥大

相撲に関わる地域の「バカ者」が協働実践を通じて「乙亥大相撲の歴史」と「本相撲に関わる町内の相撲文化」を明らかにすることにより、乙亥大相撲をめぐるローカルな価値を再確認し、将来の乙亥大相撲の伝承に向けた基盤をつくることを目的とする。

### (3) 復興曲線インタビュー

2018年に発災した西日本豪雨水害において、愛媛県西予市野村町は5名の方が亡くなるなど大きな被害を受けた。その後懸命な復旧作業ならびに復興デザインWSをもととした復興計画の策定、水害を契機に発足した「NEOのむら」による「がいなんよ大学」など様々な取り組みがなされるようになった。しかしながら、野村町で被災した住民が、この復興過程をどのように捉えているかについての調査はいまだなされていなかった。水害から5年を契機に、これまでの復興過程を振り返り、今後の野村町の姿を構想する上で、丁寧な聞き取り調査が必要とされる。

本研究の目的は、被災した野村町民に復興過程を振り返ってもらうことで、復興過程で感じた課題や良かった点を明らかにすることである。また、災害後に新たに出会った「よそ者」とどのように関わり、「よそ者」がどのように地域を変えたのかを、以前からの住民目線で整理する。

### (4) 復興に向けたアクションリサーチ

私たち研究チームは、災害復旧をきっかけに野村町のまちづくりにかかわるようになった。その中でキーとなるのが、野村地域の名士である緒方家（緒方酒造）である。大阪大学の原点は、緒方洪庵が開いた「適塾」であり、洪庵と緒方酒造とは親戚筋にあたる。この縁で、研究分担者が被災した同酒造へボランティアに入ったことが本研究の発端である。その後、2018年～2020年度に18回当地を訪問し、各団体と情報交換を重ねてきた。2020年3月には愛媛大学社会共創学部、野村地域自治振興協議会それぞれと、大阪大学人間科学研究科とで連携協定を結んだ。

2019年11月には地域自治振興会やNPO法人などの地域団体をつなげ、酒蔵を会場に「文化としての“お酒”そして“相撲”」をテーマとする講演会を開催しており、10月には「野村のいま」を酒蔵から」と題して、野村と各地をインターネットでつないだ催しを実施してきている。

地域の復興において地域全体が力を合わせて、コミュニティが再び形成されることが理想的ではあるが、現実には地域内ではすでに様々な権力構造が構成されており、分断がある。地域の人たちとの関係の網の目から漏れている不可視化された「はれ者」は、地域の「ばか者」とは結びついておらず、地域の人的、物的資源が最大限に活かされていなかった。その状況で「よそ者」は、しがらみのない立場から「はれ者」と「ばか者」などの地域住民の関係をつなぐ媒介者となりうる。つまり、私たちの大学の研究者が「はれ者」の施設で講演会等の催しを開催し、復興支援の日本酒「緒方洪庵」の販売において行われる様々な活動をとおして、「ばか者」を含む地域の多様な人々を結びつける試みを行う。

## 3. 研究の方法

### (1) 酒文化調査

野村在住の26名（男性20名・女性6名/80代1名・70代4名・60代7名・50代4名・40代8名・30代2名）を対象に、聞き取り調査を行った。聞き取り項目は 自己紹介、酒との主な関わり方、酒豪伝説、その他、酒にまつわるエピソード、「スーパードライ」との付き合い、緒方酒造「緒方洪庵」等に対する思い、野村にとっての酒文化、の7点であった。

### (2) 乙亥大相撲調査

本研究は現在の乙亥大相撲に関わる「ばか者」たちに本研究チームである「よそ者」が加わることによる協働実践で行われた。具体的には「乙亥大相撲の歴史」の解明については、野村地域自治振興協議会内に研究チームも参加する「乙亥大相撲歴史編さん部会」を立ち上げ、乙亥大相撲に関わる各種地域資料の探索と整理、新聞記事の探索、往時の乙亥大相撲に関わってきた地域住民へのインタビュー、現在の乙亥大相撲の観察等による「乙亥大相撲史」の作成と並行して行われた。「本相撲に関わる町内の相撲文化」についても「乙亥大相撲史」の一部として行われ、相撲に関わる各種経験に関するアンケート調査を野村町と全国とを対象として実施し、野村町民の相撲文化への近しさについて検討した。

### (3) 復興曲線インタビュー

水害で大きな被害を受けた住民を中心に15名（述べ18名）の方にインタビューを実施した。復興にかかわった市役所職員・社協職員・野村商店街関係者・観光協会等役員経験者を主な対象としたが、水害の被害の大きかった人びとであること、災害から復興にかけての経時的な変化を把握している人びとであることの2点から対象者は選定した。インタビュー項目は、災害時の様子、その後の様子、コロナ禍での様子、現在の復興度はどれくらいか、外部支援者が野村に関わり続ける中で、地域の人との関係は変化してきたかなどを中心に話の流れにしたがって取捨選択をした。また、その際に復興度を発災時から現在まで図示してもらいながらインタビューをする復興曲線インタビューの形式で行った。インタビュー時間はおおむね1時間から1時間半程度であり、適宜オンラインインタビューも活用した。

### (4) 復興に向けたアクションリサーチ

私たち研究グループは、「はれ者」も包摂した地域全体の内発的復興を目指すため、酒造りを終えた緒方家の蔵を使用させていただき、まちづくりの拠点として、2021年度から蔵で大阪大学、愛媛大学、野村地域の人々が順次主催者となって、「がいなんよ大学 in のむら」という講演会等を開催した。2024年3月末で15回を数える。2021年、2022年には愛媛県と南予の9市町が計画する「えひめ南予きずな博」において、緒方家の蔵での私たちの催しが復興シンポルイベントの一つとして開催された。

2021年度には緒方酒造が作っていた日本酒「緒方洪庵」の復活と緒方の蔵をアカデミックな催し場に改修するクラウドファンディングを計画・実施した。また日本酒「緒方洪庵」の販売・宣伝によって、大阪を中心とする地域で西予市野村町の復興支援に協力していただく催しを企画・開催した。その際には、大学の関係者による学術的な催しだけではなく、落語家の「緒方洪庵の新作落語」や一般の方への販売・宣伝なども実施してきた。

また、福山市立大学、大阪大学、愛媛大学などの学生が西予市野村町の高校生と一緒にイベントを行うことも試みてきた。

このように大学だけで野村町のまちづくりを行うのではなく、一般の人、高校生なども巻き込んで、イベント等を行い、まちづくりを考えていくという方法をとる。

#### 4. 研究成果

##### (1) 酒文化調査

野村にとっての酒文化の特質・意義としては、(1)コミュニケーションツール、(2)社会の縮図、(3)シビックプライドと関係人口、(4)セーフティネットと復興、(5)酒文化の継承、が挙げられる。

「サシアイ」は挨拶のようなもので、社会の潤滑油として機能し (1)、飲み会は社会勉強の場であるという (2)。人口流出が課題となるなか、Uターン組にとっては飲み会を通じた交流が地元の魅力を再発見することにつながり、他地域との交流では「サシアイ」を自慢げに披露するという。そこに魅力を感じる関係人口も増えつつある (3)。水害の際には、酒席を共にした人の安否が気になり、支援に動く動機となった (4)。年少者から「サシアイ」を行っていく慣習が、酒文化の継承を可能としているが、コロナ禍や若者の酒離れ・飲み会離れという存続の危機も内包している (5)。

##### (2) 乙亥大相撲調査

まず、「乙亥大相撲の歴史」について、本研究チームは緒方家が勸進元となって開始した「三十三結び」に着目した。「三十三結び」の定形的な由来である「三十三結びの相撲を『100年間』奉納」によれば昭和27年(1952)が満願であるはずが、関係者の聞き取りおよび各種資料の検討の結果、同年に何かかの記念行事が行われていないこと、そして、昭和30年代にはすでに「三十三結び」が行われていなかったことが確認された。加えて、各種資料の検討により「100年を満願」とする説明がすでに「三十三結び」が行われなくなっていた昭和30年代末に初出していることから、研究チームとしては「三十三結び」はその始まりが「100年を満願とする」と決められていたものではなく、後付けで「100年を満願とした」ものである可能性が高いものと結論付けた。この背景としては、戦後のプロアマ対抗戦を中心とする乙亥大相撲の興行化・競技化に伴い、「三十三結び」を厳密に行うことが困難となったことが推察される。いわば地域の「ばか者」たちによる乙亥大相撲の現代への適応策が「三十三結び100年言説」だったといえ、その良し悪しは別に、伝統からの解放が乙亥大相撲を現在に伝える一つの選択であったといえよう。一方、本結果を通じて、100年の奉納は別にしても乙亥大相撲の由緒が「三十三結び」であることが関係者間に再確認されたことにより、次年度以降に何かしらの形での「三十三結び」の復活が検討されることになった。この点については本研究の結果に基づく成果の一つであろう。

次に「本相撲に関わる町内の相撲文化」については相撲に関わる経験の近しさを問うアンケート調査を野村町および全国を対象として実施した。いずれも同内容の全5問(相撲の生観戦の経験の有無・土俵で相撲を取った経験の有無・相撲部等への所属経験の有無・相撲用まわしの着用経験の有無・相撲用まわしの着用方法の知識の有無)で実施し、野村町から2,425名、全国から503名の回答がそれぞれ得られた(信頼度95%・標本誤差5%)。その結果、いずれの設問においても野村町から得られた結果が全国の結果よりも有意に高いことが実証され、全国的に見ても野村町民の相撲に関わる各種経験や知識は高いことが明らかとなった。当然、こうした相撲に関わる経験の近しさは乙亥大相撲の存在によるものであり、こうした乙亥大相撲を支える各種の相撲文化の重要性や後継者の育成が関係者に再確認された。加えて、本調査の結果説明に関わり「全国との比較であり、他地域との比較ではないため、野村町よりも相撲に関わる各種経験が深い地域が無い」とは言い切れない」という点から、関係者間では乙亥大相撲以外の大規模な奉納相撲や草相撲が行われる地域に注目が集まるようになってきている。この点では今後はこうした地域との相撲を通じた交流、いわば「相撲に熱をあげた地域の『ばか者』たち」の交流による新しい相撲文化の生成が期待される。

##### (3) 復興曲線インタビュー

その結果、以下の4項目が明らかになった。水害の被害は甚大であり、十分な備えはできていなかった。もともとの地域コミュニティの力が活かされ、復旧は比較的早かった。いよいよ

これから復興というときに襲ったコロナ禍の影響が極めて大きかった。過疎化の進行により、復興したとしても「100%」にはならないと感じる反面、水害後に関係を持つこととなったボランティアや移住者の影響力が大きいと感じている。

これらのことから、水害からの復興においては、水害による被害からの復興のみならず、その後襲ったコロナ禍の影響ならびに、以前から課題としてあった過疎高齢化への対応も同時に行われなければならない。そして、これらを行うためには、移住者や二拠点居住者をはじめとする野村と関わりを持つ人々とのゆるやかなネットワークを活用する必要がある。そういう意味で、水害は、新たな関係人口を獲得する契機となったとも言える。

#### (4) 復興に向けたアクションリサーチ

「がいなんよ大学 in のむら」と「えひめ南予きずな博」の催しにおいては、大学教員だけでなく町の人々も講師役となり、ともに学び自信や誇りを養成するような取り組みとなった。

2021年度からの日本酒「緒方洪庵」の発売に際して、クラウドファンディングを実施し、全国から支援を受けて、緒方家の蔵も高齢者も入りやすい床面に改装した。日本酒「緒方洪庵」の販売においては、販売において得られた利益相当分はすべて西予市野村町の災害復興・まちづくりなどの社会貢献に使用することを条件に「緒方洪庵」を大阪大学の商標とし、大阪大学の許可を得て「大阪大学公式グッズ」とし、販売した。それによって、大阪大学内や大阪大学の卒業生に西予市野村町を知ってもらうことができたほか、大阪大学に関係ない多くの人に西予市野村町を知ってもらうことができた。たとえば2022年にはホテル日航大阪で落語家笑福亭笑利氏による創作落語「緒方洪庵～医の種」の発表会を行いおよそ60人の参加者があり、約半数は全く面識のない人であった。2024年には大阪モノレールサービスと連携し、日本酒列車が提供する日本酒の1つとして「緒方洪庵」を提供し、200人以上の参加者があり、多くの人々が面識のない人であった。同時に万博記念公園駅で「緒方洪庵」を一般の人々に販売し、大学に関係のない一般の人々に対して西予市野村町やNEOのむらの活動について広報を行った。これまでの大学の行う学術的な講演会やワークショップなどでは参加者が特定の人々に偏る傾向があったと思われるが、「緒方洪庵」の販売を通して、幅広い層へ大学の取り組みを知ってもらうことができた。

また、福山市立大学、大阪大学、愛媛大学などの学生が西予市野村町の高校生とその支援者と関わり、2022年、2023年に開催された全国高校生まちづくりサミットへの高校生の参加に付き添い、運営にも協力することで高校生の学びあるサミットの実現に寄与した。そのほか西予市野村町の高校生のまちづくりサークルであるN ジオチャレの活動や、当地の野村高校、野村中学校における総合的な学習(探究)の時間に、大学生たちが遠隔で参加しアドバイスをを行った。当地は高校卒業後に大学に通うためにはすべての若者は市外に移り住む「大学生のいない町」であるが、多数の大学生が訪れ町内行事に関わるようにもなった。とともに、高校卒業後、町を離れて都市部の大学に進学しても大学生として野村町に関わる野村出身者も出てきており、大学進学による地方離れの中で、新しい形を生みつつある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 川端亮	4. 巻 10
2. 論文標題 大学の地域とのかかわり - がいなんよ大学 in のむらと復興支援酒「緒方洪庵」の取り組み	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 未来共創	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松永和浩	4. 巻 54
2. 論文標題 銘酒「緒方洪庵」復活プロジェクト	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 適塾	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松永和浩
2. 発表標題 「飲むむら野村」とよそ者をつなぐもの 「サシアイ」と緒方洪庵
3. 学会等名 共生学会第2回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 川端亮
2. 発表標題 日本酒緒方洪庵の再生による被災地復興：地元とよそ者をつなぐ橋
3. 学会等名 共生学会第2回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮前良平
2. 発表標題 復興過程においてよそ者効果はいかにして効果的となるか
3. 学会等名 共生学会第2回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 早島大祐・吉田賢司・大田壮一郎・松永和浩	4. 発行年 2022年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 298
3. 書名 京都の中世史5首都京都と室町幕府	

1. 著者名 松永和浩	4. 発行年 2023年
2. 出版社 大阪大学適塾記念センター	5. 総ページ数 244
3. 書名 「飲む村のむら」愛媛県西予市野村町の酒文化調査 シビックプライドの醸成と継承のために	

1. 著者名 村田路人, 飯塚一幸, 吉川真司, 菱田哲郎, 松永和浩	4. 発行年 2024年
2. 出版社 枚方市	5. 総ページ数 89
3. 書名 新版 楽しく学ぶ枚方の歴史	

1. 著者名 乙亥大相撲編纂委員会	4. 発行年 2024年
2. 出版社 野村地域づくり活動センター	5. 総ページ数 123
3. 書名 乙亥大相撲 伝統を受け継ぎ、未来につなぐ	

1. 著者名 渡邊敬逸	4. 発行年 2023年
2. 出版社 愛媛県教育委員会	5. 総ページ数 348
3. 書名 乙亥大相撲・愛媛県の祭り・行事－愛媛県祭り・行事調査報告書－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	川端 亮 (Kawabata Akira)  (00214677)	大阪大学・大学院人間科学研究科・教授  (14401)	
研究分担者	渡邊 敬逸 (Watanabe Hiromasa)  (30711147)	愛媛大学・社会共創学部・准教授  (16301)	
研究分担者	佐藤 功 (Sato Isao)  (40833760)	大阪大学・大学院人間科学研究科・教授  (14401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松村 暢彦  (Matsumura Nobuhiko)  (80273598)	愛媛大学・社会共創学部・教授    (16301)	
研究分担者	松永 和浩  (Matsunaga Kazuhiro)  (90586760)	大阪大学・ミュージアム・リンクス・准教授    (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関